
crimson hate

ただの 右腕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c r i m s o n h a t e

【Nコード】

N 8 4 9 0 V

【作者名】

ただの 右腕

【あらすじ】

PS2ソフト『スターオーシャン3』のキャラクターであるアルベル・ノックスが恋姫無双の世界へと飛ばされるお話。

キャラクターに対する独自の解釈や設定があるので苦手な方はバツクで^^

其れは紅いアカい御伽噺

——男は、憎しみを抱いていた——

雪積る極寒の地に生まれ、国と国、人と人、そして生と死に翻弄された世界を、愚直なまでに生き抜いた。

——男は、憎しみを恐れていた——

鉄鋼に包まれた左手は、他でもない罪の証。
傲慢故の罪、矜持故の罪、そして己の弱さ故の罪。

その深紅色の罪状を誤魔化すかの様に只、ひたすらに強さを求めた彼は。

いつしか『歪み』と呼ばれていた。

——男は、憎しみを拒んでいた——

相容れぬ筈の互いでも、寄り添う事は出来るのだと。

剥き出しにされた左手を包み込む温もりに、教えられた。

——男は、憎しみを許していた——

そして、漸く訪れた彼の死を、とある世界の願望が再び彼を『歪』ませる。

途方もない闇の中、次第に白濁に汚されていく視界。

その深紅に映る世界は——

第一句 群青

雪はまるで空の涙の様だと、窓越しに、それこそ雪を落とすあの灰空をそのまま映したような髪を持つ女の一言を、アルベルは何と返しただろうか。

——どっちかって言うなら、そりゃ雨だろ、阿呆——

——涙なんざ、テメエ詩人にでもなつたつもりか？——

思い当たるのはどれも否定か皮肉か嘲笑と云った、本人が客観的に見ればたちまち青筋を浮かべているであろう言葉を、けれど彼女はどこか馴れた様子で小さく笑みを浮かべていた。

——でも、もしこれが涙だしたら。一体何を嘆いているのか、誰が嘆いているのか。ちよつと気になりませんか？——

曖昧な記憶の断片でそう問い掛けてくる女の台詞では、結局その時、アルベルはどちらの言葉を紡いだのかはつきりと分からなかった。

けれど、まるでアルベルには理解出来ないような、それこそ考えるだけ無駄と切り捨てそうな事を他でもないアルベル自身に尋ねる彼女の思考が、さっぱり理解出来なかったのは覚えている。

——知らん。んな事考えれる程、雪なんざに思い入れがねえんだよ俺は——

彼が生まれ、育ち、歪み、生きてきた土地、アーリグリフではこの空の涙とやらにどれだけ悩まされ、朽ちてきたか。

かつて彼と共に旅をしていた面子の中の一人の少女——ソフィアといったか——がやたら目を輝かせて雪だなんだとはしゃいでいたが、彼やアーリグリフに生きる者達にとって雪とは等しく災害としての対象でしか見られない。

だから、アルベルは目の前で雪に対して思い巡らす女の問句をどこか苛立ちを含んだ声色で流す。

——ええ、それが発端で戦争になりましたね。貴方と、私の国は。けれど、戦争の終結した今はそういう事を考えてもいいと、そう思いませんか？——

しかし、彼女は彼の部下ならば冷や汗と共に萎縮するアルベルの苛立った様子を、寧ろどこか嬉しそうに笑みを深めるだけで。

彼女の祖国とは違い肌を刺す様な冷たさを含んだ大気を遮る為の毛布に身を包んだまま、とてとと彼へと近寄っている。

——生憎とあのクソ爺とテメエみてえなこと考えんのは昔も今もこれから、俺には来ないんだよ阿呆——

——あら、酷い言いようですね。それにそれじゃあ私が年寄りみたいになるじゃないですか——

声色は拗ねている筈が、表情は彼女自身にもよく似合っている笑みが、まるで彼とのやり取りそのものを喜んでいるとも言わんばかりに柔らかい。

きつと実際に喜んでいるのだろう、何故だか他者を決して惹きつけない性格をしている筈の、アルベルとのやり取りを。

拒絶や敵意こそ向けられ続けてきたアルベルにとっては、どんなに突き放してもこうして柔らかな微笑を浮かべながらも決して離れようとしなないこの女の方が、雪よりも余程質が悪く感じられた。

……だから。

——それにしても、いい加減に私をちゃんと名前で呼んでくれませんか？いつまでも適当呼ばわりじゃ傷付きます——

——テメエはテメエで充分だろうが。勝手に傷付いて勝手にどこか行つてろ——

……だから。

——結局、まだ一回だけしかアルベルさんに呼んで貰えてませんし……——

——チッ、名前どうこうで一タシヨボくれてんじゃねえ！餓鬼かテメエは————

彼が苦手意識を抱く人物は彼にとって変わらずの王たるアーリグリフ王か、彼をまるで孫のようにからかい、それでいて大切に扱うオルター伯爵ぐらいだろうと、彼自身も思っていたのに。

いつからか、傍に居て。

いつからか、隣で微笑んで。

そんな彼女に雪よりもさらに冷たく凍てついていた彼の心は、気付かぬ内にじんわりと。

——雪云々の話はどこ行っただよこの阿呆！——

——それはそれ、これはこれですよアルベルさん——

事……」

「くっ、だらねえ……今になって何でまた、んな

霞んで行く景色の中、きつとそれは何気ない俺自身の思い出の一つ。

以前までの俺ならこんなザマになって、かつ思い出す事がこれじゃあ日和りやがってと唾棄すらしていた筈が。

「……どうしたん、ですか？アルベル……さん……」

覗き込んで来る、女の顔。

造りの良い筈の顔付きはくしゃくしゃに歪み、白濁混じりの視界でさえくつきりとボロボロになった涙の跡が見える。

——ふざけんじゃねえ、いつ、誰がお前にそんな顔をして良いと言

った。

いまいち力の入らない右手でその顔を無理矢理、血にまみれた胸へと導いて。

未だに泣いてやがる馬鹿な女に、最後を託す。

「クレア……良い、か。最期に、一つだけ言って、おい、て……やる……」

「え……？」

鉄の味に満ちた口元を、歪めて。

いつもコイツが……クレアがしていたように。

笑う。

——視界が霞む——

笑う。

——光が負ける——

「俺の事は、忘れる。いい、な……」

笑、う。

笑、う……

——馬鹿者が——

最期に聞こえたのは、あの女の声ではなく、どこか呆れたような、それでいて耳に馴染んだ男の声だった。

第二句 陽炎

——寒い。

永い、永い微睡みが薄れたいく矢先、まず第一に脳裏によぎった感想が、その一言に尽きた。

極寒とも云える土地で常に薄着かつ鼻屑目に見ても女装に近いほど物珍しい格好をしていたアルベルにとって、ある程度の寒さであれば特に何の違和感も感じない筈である。

しかし、まるで寝耳に水が如く全身に押し寄せる鋭利な冷圧が深い淵に収められていた筈の彼の意識を徐々に覚醒へと導いてゆく。

——畜生、何だこの寒さは——

身震いを覚えるとかの話ではない。

まるで流水の大河にでも投げ込まれている錯覚すら覚えるほど、彼の表情はみるみる険しく歪んでいく。

——一体何だつてんだクソがッ……俺は今何を……ッ!?!——突き刺さるような凍痛に微睡みは消えた次の途端、漸くにしてアルベルは脳裏にこびり付いた違和感に気付いた。

有り得ない事、そう、有り得ない筈だろう。

寒さを感じ、あまつさえ思考すら巡らしている己が身は、確か死を迎えていた筈ではなかったか。

——俺は、くたばったは、ず……——

薄い靄に曖昧に遮られていた己の最期、女の泣き顔、ただ一つのだらない願い。

きつとアルベルが言ったどんな罵詈雑言よりも深く、彼女の心を傷付けたであろう言葉さえも彼が思い出した時——暗闇に覆われた視界が、晴れた。

「——ッ!?!? ガッ、コ……アアッ!」

狂気に満ちた獣の雄叫びを彷彿させるアルベルの怒声は、彼自身の耳へと嫌な音混じりに届く。

それは、水の音。絞り出した低音の叫びはガポゴポと喉を苦しめ、まるで溺れてでもいるかの様に。

——否、実際に彼は、アルベルは溺れかけていた。同時に、死にかけてもいた。

死の淵より覚醒した矢先に、またも死に目を見るなど誰が予想出来るものか。

全身を襲う刺々しい冷たさの原因が早くも理解出来た頃、徐々に呼吸を整えて冷静に勤める様にアルベルは目先に映る光を目指す。

「——！！」

鉛でも引き摺っているのかと錯覚してしまう程に重い身体を懸命に上へ上へと。

まるで掴めない状況に苛立ちを覚えつつ、彼はひたすらに酸素を求め——そして。

緋色の眼が見据えた先、揺らめいて映った光へと届いた瞬間、彼は自分がどういいう状況に置かれていたかを漸く理解する事が出来た。

「ッ、ゲホッ……ふ、ざけんじゃ、ねえぞ……」

幾らか飲み込んだ水分に計り知れない嫌悪感と押し寄せる寒気に、深紅の瞳が剣呑な雰囲気をもって細められる。

死体に鞭、とでも言うべきか、死を迎えた筈のアルベルが意識を取り戻したのは、何故か深い水の中であつた。

それも、見渡してみればそれなりに陸遠い水面と、深い緑を茂らした木々。

その葉色からしてアーリグリフでは決して見る事のない光景が、余計に彼の混乱を招く。

——恐らくは、シーハーツ寄りもしくは領内の、湖。

その湖のほぼ中心であろう場所でアルベルは溺れかけていたのだから、いまいち理解が追いつかない。

「何処だ、此処は……」

明らかに混乱を招く状況に置かれてしまっている彼は、悪態を付きながらもゆっくりと陸を目指す。

掴めない現状に腹を立てていても仕方がないのは分かつてはいるが、取りあえず相手のいない恨み言を呟かずにはいられなかった。

何にしろ、寒い。

どれだけの間、水中に居たのかは彼にとって知った事ではないのだが、その為にアルベルの身体は冷え切ってしまったている。溺死の次は凍死の危機に直面してしまっている彼の唇や顔色は、不健康だと一目で分かる程に赤みを失っていたのだから。

「……」

理不尽かつ不明瞭な状況へと放り投げられたアルベルは、不平不満を隠す事なく、それでもひたすらに水を掻く。

痺れにも似た感覚に苛まれつつある手足を緩めてしまえば、下手をすれば溺死してしまうと思えたからだ。

否、このままでは溺死してしまうのだろう。

湖の深さなど生真面目に考えれる時間もないが、まずヒト一人の身体など容易く埋まる深さである。ただでさえ武器や防具の負荷があるのに、コンディションは最悪。

最強で在れ、それを常に全てに刻み込むように鍛えてきた彼だからこそ、まだ辛うじて生を繋いでいる状況だった。

——しかし、不意に。

「……あ？」

激しく波立つ水面、魚が跳ねる際の水が弾ける音と共に。

「……大丈夫か、お前」

——呼んだ覚えもない救いの手が、返答も待たずに肩を掴んだ。

アルベルにとってみれば助けを求めている訳でもない対象に頭を下げるなど彼自身の綻びた矜持に反する行為であるし、礼を尽くす事など論外であった。

クレアという人物に少なからず心境に変化を与えられていた彼ではあるが、根本の『歪み』の部分はそう容易く変えられやしない。

それ以前に目下でばけつと此方を呆けるように眺めている少女は、助けるだけ助けた割にアルベルに対しての興味が薄い、気がする。現にどうしてあの場に居たのかとか尋ねる訳でもなく、死ぬ所だったんだぞと諭す訳でも憤る訳でもなくただ感情色の載らない丸々とした瞳が覗くだけで。

「……おい」

濡れた少女の柔らかな朱色の髪を乾かそうともせず黙ったままの様子に居心地の悪さを感じたアルベルは、取りあえず変に重苦しい沈黙を惡とした。

「……なんだ？」

本人の認識自体はともかく割と切羽詰まっていたアルベルにとって、鈴が鳴るような少女の声を聞いたのは初めてに感じられた。どこか光の抜けた虚ろな眼が漸く色を付けたと思えば、小首を傾げた途端にまた薄くなる。

「………」

単に気疲れのする沈黙を嫌っただけのアルベルは、声をかけたは良いが肝心の内容について何も考えていなかった。

基本的にコミュニケーション能力に乏しいアルベルは、会話において受け身であつたりする事が非常に多い。

無論、彼の性格的にまともな会話が成立するのは中々無い為、アルベルと積極的に会話しようと動く人間は希少であつたが。

そして、初対面ではあるが目の前の少女も恐らくは自ら進んで言葉を紡ぐ事のない部類の人間である事は、アルベルにも分かる。

だから口ごもったアルベルに対して視線を外し、傍らの比較的にやせ細った木へと歩き出した少女に、何の言葉も浮かべなかったのは少しばかり彼が残念な部分であるが。

「……ン」

しかし、漸くアクションを見せた少女が恐らく咄嗟にアルベルを助ける為に放り投げたであろう巨大な『得物』を目にして、冷え切った彼の身体が躍動するかのように一気に熱を持った。

――興を抱かずに居られなかった。

――何に？

――彼女が手にした武器。

――間違いではない、しかし。きっと本質は別。

――では、何に？

――アルベルの随分前に萎れていた本能が震える。

――いわば彼にとつての一種の麻薬であり、生涯の『さが』である。

それは、圧倒的な強者との対峙。武器を手にした途端、彼女から感じられたおぞましい程の絶対的な強者の覇気を垣間見た、ただそれだけ。

「――ク」

ただ、それだけで。

これ以上とないほど愉悦に満ちて口角を上げたアルベルは、ごく自然に己の愛刀へと手を忍ばせて――止めた。

否、萎えたとか脱力したとか呆氣に取られたとか、そういった言葉遊びが一番的確ではある。唐突な愉悦による興奮状態であったアルベルを興奮めまでに落ち着かせたのは――

「んぐもぐ……ん？お前も欲しいのか？」

その身を越えるほどの巨大な戟を肩へと乗せながら、どこから取り出したのか分からない、ゆらゆらと湯気だった肉まんを頬張る少女の姿。

彩色豊かな戟を肩に小動物のように飯を頬張る彼女の姿が滑稽に映り、一瞬垣間見た強者としての立ち姿はガラガラと崩れされば、もはや彼が刀を向ける理由は失せた。

だが、取りあえず――

「いるか阿呆！」

勝手に期待して勝手に落胆したのは此方だが、責めて何かしら吠えておかねば、状況に振り回され気味である彼の精神は保たなかった。

「……お腹空いた」

「今食ったばかりだろうが」

もうなんだか色々馬鹿馬鹿しさが募り精神的な疲労もあって疲れ気味のアルベルは、取りあえず現状を把握する為の貴重な情報元である少女の食事を待つ事にした。

その最中、彼は一度思考を深め、最初に自身の状況を出来る限り整理する事に務めて——目を逸らしたくなる様な事実気付いた。

——まず、義手代わりの鋭利な作りをした手甲が消えていた事。

湖の中にでも落としたのかとは思ったが、無我夢中で泳いでいた割には手足の感覚はハッキリとしていたアルベルは、その可能性は薄いと見る。

であれば恐らくは最初、彼が目覚めた時から既にアルベルの『歪み』をまさしく象徴していたあの義手は無かったのだろう。——クソつたれ！！

あれが無ければ彼の戦闘能力はかなり下がる。半減とは言わないが、片腕を使えないのは厳しい事には違いない。

——次に、奇妙な体調不良。

ハッキリと自覚したのは、純粹に風邪でも引いたのかと自身に対して回復魔法であるヒーリングを唱えた瞬間だった。

戦闘に長けたアルベルをより生かそうとかつての仲間フェイトが無理矢理覚えさせたテキストによって習得した魔法ではあったが、その効力が明らかに半減を下回っていた。

彼の精神力は滅茶苦茶な状況下のせいで磨り減ってはいたのだが、ヒーリングを唱えれないほどでは無い。その上、風邪による熱や咳も無ければや寒気も今では微々たる程度、だというのに妙に身体が重い。

こればかりはかつての仲間であるソフィアみたいな純然たる魔術師でも、医療知識のある医者でもないアルベルにとっては分からず終いである。

——そして、最後に。

——彼の愛刀であるクリムゾン・ヘイトが先程から一言も喋らない事である。

かつて彼の父であるグラオ・ノックスが使用していた、魔剣クリムゾン・ヘイト。持ち主の生気を奪うだとか、持ち主に選ばれた者は必ず壮絶な死を迎えるだとか血生臭い逸話ばかりを受けたその刀は、確かに普通ではなかった。

人格が有り、所有者に力を与え、挙げ句喋る、それも意外ながら口が達者であり会話自体を好むくらいすら見えた。

しかし先程からどういう訳かアルベルが心内で幾ら呼びかけても無反応であるし、クリムゾン・ヘイトから常に流れていた力の奔流は全くといって感じられない。

寧ろ、ただ業物ではある刀に成り下がってしまったのだろうか。

アルベルにとつては珍しく思考を巡らした事により判明した事実が多いが、反面で理解不能である現状がより一層分からなくなってしまった結果に終わってしまった。

「お前に幾つか質問がある。答える」

「ん」

口端に米粒を付けたままのある意味分かり易い間の抜けた姿を、何時の間にか解けてしまった後ろ髪を無理矢理ひとつくりに纏めたアルベルは無視する事に決めた。

ヒトに物を頼む姿とはとても思えない傲慢な口調に、腹を満たしてご満悦なのか最初から気にしない性なのか、少女はただ無機質に頷くだけだった。

「……まず、此処はどこだ？」獣の尻尾を彷彿とさせる長い後ろ髪と共にクルリと周りを見渡せば、目に映るのは緑生い茂る彩色の深い森林と、作為的なニュアンスも感じれる見事な円形をした湖のみ。大地の干からびたアーリグリフでは有り得ない光景から、おおよそアルミラ平原かシーハーツ領域近辺だろうと予測を立てる、が。

柔らかな顔に引つ付いた僅かな食べ残しを指で掴んで口へと放り込んだ、褐色の肌に刺青といった改めて観察すれば奇妙な出で立ちを

した少女の口からは、まるで想像の外を付いた言葉が飛び出した。

「……？ 此処は、洛陽から二里ぐらい離れた場所……」

——あア？ らく、よう……？

寧ろなんでそんな事を聞くのかといったニュアンスを込めた瞳を向けられながらも、アルベルにとってはまるで気にならない。

そんな事よりも、シーハーツ付近であればかつての仲間であり因縁であつた女隠密に連絡を飛ばそうだのと一考していた彼にとって、ラクヨウと発音された地名に一切聞き覚えがなかった事の方に戦慄が走る。

ねつとりと気味悪く背筋を撫でる感覚を、アルベルは知らない訳ではない。

例えば初めて断罪者と呼ばれる怪物を目にした時などにも抱いた、いわゆる『怖じ気』と呼ばれる感覚であつた事など、やたらと勘に優れたアルベルは確かに覚えていた。

「……それは何処の僻地だ、ラクヨウなんざ初めて聞いたぞ」「それは、変だ……洛陽は都、知らない筈ない」

都という言葉の意味が違うという訳ではないのは、会話の流れやニュアンスで少なくとも理解出来る。

あまりに似合わない理由からではあるが、実はアルベルはアーリグリフの由緒ある貴族に名を連ねている。無論、幼少の頃からある程度の教育は受け、戦場における知識や歴史、帝王学には精通していた。

であれば、彼の住む大地にある各国の名称や位置を、アーリグリフの最高戦力である疾風団長の地位に居る彼がいずれ政治の席に座らされる為に半ば嫌々ながらも把握する必要があつた。あつたのだ、そして単純な座学においては優秀である彼はそれを達成した筈であるが。

「……笑えねえぞ、糞虫が」

女性にも似た麗美な横顔が歪む。

まるでスツキリしない現状に、悪態を吐かずには居られない。死を

体験したと思えば生きていて、生還したと思えば水の中、拳げ句、漸く付けた足は聞いた事も見たこともない土地。

まるで神の下らない悪戯を直面に受けているのかと天を睨み付けるアルベルは錯乱していてもおかしくは無かった。

「……ん」

だが、不意に。

理解不能の一角に脳内を埋め尽くされ奇妙な嫌悪感による吐き気が喉元を通過した所で、くいくいと後頭部を引っ張られる感覚を味わう。

無理矢理現実へと戻され、かつその方法がきつと彼にとって宜しく無い行為であったのが重なって、綺麗に切り揃われた眉毛が一気に吊り上がった。

「引っ張んじゃねえ、阿呆！」怒鳴りながら何故かわざわざ彼のひとくりにされた長い後ろ髪をクイクイと引っ張っていた少女の手を、乱暴に払う。

ピクリと少しだけ驚いていた少女に悪気は無いのだろうが、特に意に介した様子にアルベルは何とも言えなかった。

「……お前、名前は？」

「……あア？」

健康的とは言えない湖へのダイブまでやっておいて今まで余りアルベルに興味を抱いていなかった少女が、今更何故彼に興味を持ったのかは分からない。

だが、虫の触覚に見えなくもない奇妙なアホ毛をぴこぴこと動しながらじつとりと見つめてくる彼女に、アルベルはいい加減面倒になったのか、普段の彼らしく邪険に扱う事も無視を決め込む事も無かった。

「……アルベル」

「ある、べる？」

微妙にカタコトで喋るのが少しばかり気にいらないが、別に深く気にする必要も無い。

ノックスという姓名も名乗るのも面倒だと感じるほど、アルベルは想像以上に疲れていた。

「あるべ、る……アルベル……」

「ブツブツとヒトの名前連呼すんじゃないねえ、気色悪い」

普段聞き慣れない発音なのか、ぽつぽつと蚊の鳴くような小さな声でアルベルの名を反復する少女に、なんだかげんなりとする。

正直な話、アルベルの磨かれた感覚が脳に告げる、確信めいた勘。

—— 此处はきつと、アーリグリフやシーハーツがある世界ではないではないか。

かつてフェイトやクリフが会話していた時に拾ったエリクールだの惑星だのという単語。

もしかすれば、無数にも近い数で存在する星の一つのどれかに、自分とは追いやられたのではないか。

「アルベル……アルベル……うん、言える、大丈夫」

未だにブツブツと目の前で人の名前を囁き続けていた少女を前に、もしかすれば途方もない場所に訪れてしまった感が否めない現状であまりにどうしようも無い展開に溜まらない鬱憤を吐き出すかの様に、アルベルは悪態を付いた。

「——くそつたれ」

第二句 陽炎（後書き）

—To be continued.

第三句 空蟬の声

穿たれぬ月の形をそのまま象った湖を囲う多くの木々から中々に深い森かも知れないと予測を付けていたアルベルの想像とは裏腹に、暫く歩くと共に徐々に木々の生える間隔が広まって行くのに、案外森を抜けるのは速いのかも知れないと考え直した。

鬱蒼と伸びる尖った葉を付けた細長い枝を馴れた手捌きで排除していく目の前の少女が自分の事を何故かアルとあだ名で呼ぶようになってから、そう時間は経っていない。

一先ずは彼女が言う都と云う洛陽とやらで情報の見つめ直しと収集をしなくてはならないと考えた時、意外にもその意を汲み取ったのか来るかと一言告げた彼女の後を追う作業が始まって、まだ少しの刻。

互いに言葉を扱うのが下手と見える者同士にしては、やけに凸凹でそれでいて厚みのある意志疎通が出来たのはアルベルにとって不思議で仕方が無かった。

「おい」

「……どうした、アル？」

アルって呼ぶんじゃないかねえ、と彼女に怒鳴り散らした所で暖簾に腕を通すのと同じく効果が無いのはもはやアルベルは不服ではあるが、理解している。

動物でも相手にしてるのか嫌に丸っこい瞳で此方を見つめる少女を相手にする事は、疲れる事ではあるし正直気に入らないとも思う。だがそれと同時に一瞬だけ垣間見た彼女の謙色無い強さは、アルベルにとって珍しく興味の対象になり得る材料であつたらしい。

「テメエの名前、まだ聞いてなかったな」

「……」

他人の名を尋ねる前に、まず自分の名前を名乗れという普段の彼なら間違いなく言うであろう文句を告げなかった為か、完全に彼女の

名前を聞きそびれていた。

あまり他人の名前を呼ぶ事が無いけれども、少なくともあの心内に眠った冷たい狂気を掴み上げようとした少女の覇気を、どうしても強さに確執を抱くアルベルには無視出来ない事である。

だから、深みの奥に冷たい光を宿した真紅の瞳は、はやく答えるところか急かすように細められた。

「恋は……呂布」

「……レンワリヨフ？　なんだその名前は」

「違う。恋は真名だ」

名前を言い間違えてしまったのか初めて不機嫌そうに瞳を細めた少女の訂正に、また一つアルベルの中で疑問が構築される。恋、呂布、真名。

単純に言えばこの三つのどれかが名前であるのは間違いないのだろうが、単純に考えれる恋は、会話の流れからしてどうやら違うらしい。

であれば呂布か真名、このどちらかと言う事になるのだが。

——異国の言葉なんぞ知った事じゃねえが……

普通に考えれば、少女の名は真名だと云う事になるが、それではどうにも違和感を感じてしまう。

名前一つでぐだぐだと何を悩んでいるのかと、別にどう呼ぼうがアルベル自身に関係ないだろうと、乱暴な囁きが脳裏を駆け巡る。だが、少女が呟いた『真名』という単語に、僅かに含まれていた真剣さが彼に逆らえないストップをかけていた。

「……なんなんだ、その真名って奴は」

結局頭を使う事自体が嫌いなアルベルが幾ら自分で考えても分かる道理ではないのは明確であったので、素直に尋ねる。

素直といっても、ぐるぐると彼からしてみればあまり興味の湧かない事に頭を使わされた事に対する苛立ちが、舌打ち混じりの語気に現れているのだが。

しかしそのアルベルの問い掛けが予想外だったのか、小気味の良い

歩調でサクサク荒れ道を進んでいた少女の足が、ピタリと止まった。

「知らない、のか？」

「知らないから聞いてんだろうが」

正直な話、このやり取りをする対象が彼女であつた事は非常に幸いであつた。

感情を表にする事の少ない彼女であれば、瞳に宿す感情が純粹な驚き一色に染まるだけだ。だが例えば、そんな事も知らないのかと僅かでも相手を見下すような感情が視線に混ざっていれば、他人に馬鹿にされる事にこの上無く敏感で、気に入らないアルベルは即座に腰元に備わつた愛刀を抜いていただろう。

そしてまた、アルベルがそう思われても仕方が無い程に。

——『真名』とは、此の大陸にとって誰もが知っている筈の習わしであつた。

「……真名は、その人にとって神聖な名前。恋だつたら、恋。恋が、真名。だから真名は、その人が認めた人でなければ呼んではいけない」

「……あア？」

口下手と見える言葉足らずな、それでいて言葉自体に込められた想いや意義は深く、どうでも良い話だと投げやりな構えを作るには、今のアルベルにとっては出来ない行動であつた。

——その人が認めた人でなければ呼んではならない。

成る程、つまりは真実の名前と書いて真名であり、概等しない者がそれを呼ぶ事は禁忌にも等しいという内容の、言わば風習であると。気のない返事ではあつたが、概ねの内容をアルベルは理解出来ていた。同時に思う、詰まらない風習だと。

名前とは本来、個々に対する記号だと考えており、それをわざわざ神聖だのと扱う必要があるのか。誰かに呼ばれる為の存在が、呼ばれる誰かを選ぶ存在に昇華した所で意味はあるのか。

それはきつと、真名という風習を持たない自分では理解出来ない事なのだろうと、アルベルは面倒だと思ひながらも湧き上がる反発心

を殺した。

「……つまり、テメエを真名で呼ばず呂布って呼べ、そういう事で合ってるのか？」

「……それで、良い」

誰かに解釈を達成させた事に対する満足感が、少しだけ頬を緩めた少女——呂布に、やれやれだと疲れたように溜め息をつく。

もうすっかりと乾いた後ろ髪を気怠げに掻きあげながら、再び森を抜ける為に歩き出した呂布の後についていく。

大事だとか大切だとか、今の自分に果たしてそう思えるモノがどれだけ残っているのか。

——アルベルさん。

草葉を通り抜ける風に混じって、何故だか遠いと感じるアルベルにとって大切な、誰かの声を思い出しながら。

「ちんきゅーキーック！！」襲撃は、唐突だった。

湖を囲う深い森を抜けた先に待ち受けていたのは、あまり静観とは言えない痩せた広大な大地と見つめる眼差しそのものを焼き尽くすかのような強い日差しと、首筋に放たれた幼稚な殺気。

いつ飛び込んできたのか分からないくらい狡猾なタイミングではあったが、純粹なる武力でのみ地位を築けるアーリグリフで三つある武装集団全ての長にあるアルベルの反応は、多くの疲労を蓄積している身体とは思えないほどに速い。

現に襲撃者からアルベルを庇おうと行動した呂布でさえ、目を見開いていた。単なる一個としては溢れ過ぎている力の奔流を持て余すほどの存在が、彼の反応の速さに驚いているのだ。襲いかかろうと叫び通りの飛び蹴りを放った者の驚愕は、字をするにも余る。

「のわああ！？」

ぺちんとまるで光に集る羽虫を追い払うのと同じく、鬱陶しいとい

う感情を全面に出したアルベルの手が、彼へと飛びかかった小さな影を無残に地へと落とす。

なんだか同情を誘うような間抜けな悲鳴と共に乾いた地面へ口付けを交わした小さな影の頭を足先で軽く小突きながら、アルベルは冷たく細められた瞳をぽかんと固まっている呂布へと向けた。

「知り合いか、この餓鬼？」

「……うん。真名がねね、陳宮って呼んであげて」

ペシペシと何の感慨も無く陳宮と呼ばれた少女の頭を軽く何度も蹴りながら、当事者を余所に勝手な紹介が進んでいく。

あくまで淡々と人を文字通り足蹴にするアルベルをさして止める事もない呂布に、若干切なさを感じつつもその小さな影は頭頂部をノックする足を払いのけた。

「お、乙女の頭を足蹴に歓談とは鬼か！！悪魔かあー！！」

「寄るな騒ぐなくなれば阿呆」「誰が阿呆ですか！誰がくたばりますかあー！！恋殿、こやつに何か——」

「お腹、空いた……」

「恋殿お——！！？」

突き抜ける蒼穹の空を気怠げに見上げながら、足元でやいやいと騒ぎ立てる存在を暴力的に黙らしてみようかと考えるアルベルの顔は、明らかに面倒臭いと語っていた。

いきなり飛び蹴りを交わしてくるかと思えば隣でぼけつと雲を見ながら涎を垂らす呂布の知り合いで、陳宮と呼んでやれと言われた少女は、もはや敵意を全面に剥き出しながらぼかぼかとアルベルの腹を殴り続けている。

目を覚ましてからというもの、唐突過ぎる事や理解の範疇を超える事の連続が重なり続けて、アルベルはどうにも目の前で騒ぎ立てる陳宮の相手をする気になれないでいた。

「このっ！このっ！散々乙女を弄んでもう眼中から外すとは何事ですか！」

「……おい、呂布。さっさと洛陽とやらの案内しろ」

「分かった」

「れ、恋殿を顎に使って、挙げ句この陳宮を無視とは……何様のつもりかぁー!!!」

「ねね、うるさい」

「恋殿おー!!!?」

もはや腰元で喚く存在など視界に入ってすらいらないのか淡々と当初の目的を果たそうとするアルベルの態度に、陳宮の憤慨は更に熾烈を極めようとした所で、呂布の静かな一括が彼女の込みあがった激情を一気に氷点下まで叩き落とす。

常に呂布と云う存在によって支えられ、救われてきた身として、彼女の言葉であれば大抵の事ならば叶えたいとは思っている陳宮であったが、これは幾らなんでもあんまりである。どこからどう湧いたのか知らない奇抜な出で立ちの男が、それも幼子が見れば大泣きする事間違いないの強烈な眼差しを持った男が、何故だか呂布の隣に立っている。

その事實は、己が身は彼女を生涯かけて支える者であると自負する陳宮にとつては、決して安易に受け入れられる事ではない。

しかし、奇想天外な状況に翻弄され続けて若干やつれ気味のアルベルが、二人の関係を配慮して行動する事など言わば気紛れを通り越して奇跡に近い。無論、起きない奇跡はただの飾り夢へと成り下がってしまった訳だが。

空回った挙げ句踏んだり蹴ったりな陳宮をよそに、他人が聞けば淡々とした会話を交わしながら無情にも洛陽の方向へとさくさく進んでいく二人。時折ちらちらと打ちひしがれた様子の陳宮を振り返っては、一緒に帰らないのかと視線を送る呂布の瞳に、漸くしよばくれた少女の足が動き始める。

動き始め、徐々に加速し、そして。

完全に油断しきっているであろうアルベルの無防備な背中へと、一条の弾丸となつて陳宮が飛来する。

「天誅なのです！　ちんきゅーキークー!!!」

花が咲くような可憐な外見とは裏腹に大人顔負けの知謀を持つて数々の諸行を成し遂げてきた陳宮は、策士、戦略家と言える領域にある。

一度目は側面から、しかし通用しなかった。

であれば、次は背後からの奇襲である。

――殺った！

隙だらけの、出会って数分にも至らない間で憎き敵と判別した男の背中は確実に必殺の飛び蹴りの餌食になり、倒れ伏した男は己が敗北を見つめ、すごすごと敬愛する呂布の隣から立ち去るであろう。

陳宮は脳裏に描かれる情景に足を突き出した態勢のまま、愉悦の笑みを浮かべる。

世には、確かに生まれ持った才能と云えるべき物が存在し、人の不平等に拍車をかける要素の一つでもある。そして陳宮と云う少女もまた、知将と呼ばれても謙遜の無いほどの知才に恵まれている、筈なのだが。

哀しいかな、敬愛する主の事となるとやけに空回りが目立ってしまう点はまさしく、馬鹿と天才は紙一重という句をありありと表現していた。

「――うざったいんだよ、糞虫が」

陳宮は確かに外見からは想像出来ぬほどの知将であるし知謀にも長けてはいる、が。

所謂文官の域にある少女の蹴りがポンポンと通用するほど、アルベルという男に染み付いた戦闘の感覚は生易しくはなかった。

「のべぷっ！？」

結果、再び軽々とした身のこなしでアルベルに叩き落とされた陳宮の間抜けな悲鳴が、虚しく響くだけだった。

アルベルの祖国であるアーリグリフから見上げれば、晴天を嫌う灰

色の空はもはや彼にとっては『当たり前前の空』と云っても過言では無かった。

無論、貪欲なまでに蒼を喰らう仄暗い空以外に『当たり前前の蒼さ』や『当たり前前の朱さ』をアルベルが知らない訳ではない。雪と云う名の自然災害に常々頭を悩まされ、苦渋を味わってきたアーリグリフとて晴れの日や夕焼けが映える空であつたことは勿論ある。

唯、言わばそれは見慣れた筈の灰色の空に対するふとした違和感だったのかも知れない。

堂々たる門構えの先に突き抜けた広大な土地に幾つもの建物に、洛陽と云う都を象徴するかの様な威風に溢れた造りの宮殿。

道中、陳宮の騒ぎ声や涙ぐましささえ浮かぶ幼稚な拳を、全く、それはもう大人気ないと評されても間違いではない程に無視しながら呂布の案内通りに進む事、半刻。

まるで相手にされない事が相当参ったのかしよばれる陳宮と、そんな彼女を不憫に思つたのかちらちらと氣遣う様な視線を向ける呂布を連れ添つたアルベルは、漸く辿り着いた目的地に対して感慨を抱くどころか、胸に湧いた確かな違和感を躊躇無く吐き出した。

「……都っていう割には、随分と活気がねえな」

そう、洛陽へと続く高く聳え立つ豪華な大門を潜るまでもなく、アルベルはこの洛陽という国が本当に都と呼ばれているのか、疑わしかった。

確かに、支配する領域の広さを表すかの様に街並み自体はアーリグリフと堂々かそれ以上ではあるし、建ち並ぶ建物の数や商業の拠点を匂わせる商店が充分に判別出来ることから都と呼ばれるに謙色無い土地ではある、が。

如何に街並みが美しく土地が豊かだとは云つても、目に付く人の数

がどうにも都である洛陽の造りに比例しない。まだ昼時を過ぎた頃だと言うに明らかに人数少なく、何より道行く人々の活気と云うものに欠けていた。「……それは、仕方のない事なのです」

アルベルの疑問に答える陳宮の声は、未だに彼に対して根に持つているのを隠しきれず、若干表情も強張っている。

だが、都である洛陽に活気が今一つないという、注視しなければなかなかどうして気付けない事を瞬時に見抜いたアルベルを、陳宮の軍師としての性が評価を上げた。

歩む度に移り変わる街並みを端々にアルベルは陳宮から、数奇な運命の悪戯によって訪れる事となったこの未知の大陸の、言わば事情なるモノを聞く。

不安定になりつつある朝廷の政治に、日々募る民達の不満に、横行する汚職、そして黄巾党と呼ばれる賊徒の出現、その犠牲。

洛陽のみならず、大陸そのものを覆い尽くしかね無い悪意の渦こそが、街々から活気や笑顔を奪っているのだと、そう語る陳宮の琥珀色の瞳には、その小柄な容姿には不釣り合いな強靱なる決意が込められていた。

「……フン」

暇さえあれば終始此方を睨んだり絡んだりと面倒な奴という評価を与え続けるには、少しばかり誤植があったようだアルベルは陳宮に対する認識を改める。

しかし、それは逆に不本意ながらも降り立つ事になったこの大陸の歴史に対しての、評価を下げる事にも繋がる。

こんな小さな餓鬼に、経緯こそ知らないがこうまで固い決意を促す世の中とは、随分と社会が成り立っていないらしい。

沸々と湧き上がる世界そのものに対する『身勝手』な嫌悪感を抱いてしまったアルベルは、どうにも自分は毒されつつあるとハッキリと自覚した。

——そういった義憤こそ、アルベルが最も嫌う『偽善』だと言うのに。

……だからだろう。

「おおー恋にねね！！なかなか帰ってこんと思ったら………なんやエライモン拾ってからに」
いつの間にか歩み寄って来た、随分と奇抜な格好をした女に対する反応が、やけに遅くなったのは。

「ほお、湖で溺れかけたなんて兄さん、見かけによらず案外可愛いらしいなあ」

「全く、みっともない話なのです。恋殿もこんな無遠慮な奴、どうして助けたのかー」

どうにも腹立たしい解釈を受け続けている身としては、そもそも沸点自体が低いアルベルにとって特に陳宮の呆れたような嘲笑は我慢出来なかった。

無論、陳宮はアルベルと呂布が会おう事となった経緯を聞いたのが今回が初めてではない。

道中にも似たやり取りがあつた事から、単に陳宮は自分の敬愛する呂布の隣にぼつと現れた気に食わない男の弱みを、意地汚く掘り返しているだけだった。

「うざってえんだよ糞虫」

やや固めに握られた拳を気品もあつたものじゃない暴言と共に形の良い少女の頭頂部に振り下ろされるのも、呂布にとっては実に四度

目の光景である。

くぎや、とまた虫や家畜でも鳴かない少女らしからぬ奇声を出しながら涙混じりに頭を抱える陳宮を見て、張遼と名乗った猫目の女は、エメラルドの瞳を挑発的に細めた。

「それにしても、兄さんもかなりイケるみたいやん。雰囲気がまず並やない」

「……テメエが言うか」

変わった格好であるのはどちらもお互い様ではある。

片や男性にしてはやけにほっそりとしたアルベルのしなやかな体軀を表情するかの様な薄着に、胸当てと腰に据えられた一振り。只、特に目を引くのは真っ白な絹に幾重にも包まれ、『肌の見えない左腕』と、間違いなく奇抜である。

そして対するは、豊満な胸部をさらしで覆い尽くし、その上に袴と羽織りと云った、若干アルベルの外装に似たり寄ったりな部分が見える格好ではあるが。しかし、彼女の言う雰囲気とは外観の奇抜さを指摘している訳ではない。

——強いかどうか。

シンプルな一点にのみ集中した評価の掛け合いは、彼らの様なに武に長けた者達にとって、ある意味では自然に行われる儀式とも言えた。

現に、董色の髪を軽く弄りながら物欲しそうにアルベルを誘う女の笑みは、彼が合格ラインを通過した事を物語っているし、アルベルもまた満更でも無いように腰元の刀に手を添える。

——しかし、男と女の遣り取りにも似た交渉は、呆気なく中断された。

「……ま、流石に往来のド真ん中でやり合うつちゅーのも拙い身だからな。誘つといてアレやけど堪忍してな、兄さん」

「……チッ」

コロリと、体軀を伸ばし今にも獲物に飛びかからんとする豹を連想させた女の表情が朗らかなモノに変わった所で、アルベルの興も冷

めた。

幾らなんでも天下の膝元である洛陽の往来での喧嘩沙汰は、アルベルにとつても董髪の女にしても宜しくは無い。

けれど、呂布に続いてまたも高ぶりかけた熱意に自ら冷水をかける始末となつたアルベルの不満は消化仕切れなかつたのか、舌打ちとなつて零れ落ちる。

「……性は張、名は遼、字が文遠や」

「あ？」

「せやから、張遼、そう呼べっちゅー事やで兄さん。呆けとらんとアンタも名乗りい」

不意打ちな女の自己紹介に思わず呆氣に取られていたアルベルだったが、彼が氣を取られたのは不意を付かれたからではなく、随分と変わった名乗りに対してだった。

性や名はともかく、字とは果たしてどういった意味があるのか。少なくともアルベルの経験上、このように名乗られた事など無い。

「……アルベル、呼びたきゃそう呼べ。テメエは張遼で良いんだな？」

「なんや無愛想に名前呼ぶなあ……もつと愛着込めて呼んでくれてもええんやで？」

「結構だ」

ニシシと異性どころか同性すら魅力出来る形の良い張遼の笑顔に、アルベルにとつて歓迎はしたくない確信が浮かぶ。

強さという概念に固執するタイプの人間同士であるからなんとなくではあるが、どうやら彼は張遼に氣に入られたらしい。

なんだか置いてけぼりを食らつた呂布と陳宮に視線を向ければ、陳宮は不満氣に頬を膨らませ、呂布に至つてはぼんやりと此方のやり取りを眺めているだけだった。

「そっぴや恋つちにねね、詠が呼んでたで」

「……？」

「もしや黄巾党がまた沸き出したのですか？」

「かも知れへんな。まあ洛陽近辺に現れた報告は聞いとらんし、一応被害報告の確認とかやろうな」

きつと意図なく場を一変させた張遼の一言には、少なくとも呂布に興味を持たせる程の効力があつた。

危惧を抱く陳宮の予想の線は薄くはないだろうが、張遼の話を聞く限りでは今すぐ討伐任務へ、と云う訳では無さそうだ。

けれど召集の意は呂布達にとっては無視出来ない内容である。

「……アル、一緒に来る？」

「阿呆、行く訳ねえだろ。部外者を連れ込めば文句言われんのはダメエだぞ」

しかし、洛陽に来る事がアルベルの最終目的ではない事ぐらい、呂布は察していた。だからこそ特に深い考えもなくアルベルに同行を促したのだが、彼は呆れたように鮮血そのままの紅い瞳を伏せる。

自分には何ら関わりの無い話を流し流しで聞いた程度でも察しれるのは、呂布、陳宮、張遼はアルベルと同じ所謂軍か、軍に似た組織に所属している人間である事。

であれば召集の内容はともかく、その軍事会議に無関係の身である自分が混ざるなど有り得ない。軍人、ましてや軍事国家の最高戦力である疾風騎士団長を務めるアルベルであれば、それは当然の配慮であつた。

そもそも時にしてまだ二、三刻程度しか共に時間を共有した程度の自分に対して呂布の警戒が薄すぎる。

確かに情報収集を目的として洛陽を目指していたアルベルにとって、彼女の提案は悪くない。アーリグリフを知らない時点で身元を証明するのが困難であるのはリスクだが、情報の管理も重要な機関である軍の会議、上手く事を運べばリターンは充分にあるだろう。

……しかし。

「……良いの？」

「いいからサッサと行け、阿呆」

借りを二つも作るのは彼の気性からすれば難しい譲歩であり、何よ

り表裏が薄い呂布の純粹な瞳は、アルベルの不安定な心情をすり減らす。

だからこそ、目の前に出された小さいようで無骨な掌を、アルベルは取る事が『出来なかった』

「……分かった。霞、アルをお願い」

「ん？ええで、ウチも指示は受け取るからな。恋とねねも早よ行きいな」

「うん」

しかし、差し出された掌を下ろしたものの、諦めるつもりはないらしい。

勝手に付き人を付けられたアルベルがうつろたえる様子は眼中に無く、隣立つ陳宮を連れて揚々と去っていく呂布。

呆氣に取られたのか、振り向かない呂布の隣で舌を出して此方を挑発する陳宮に対して、アルベルは何とも思わなかった。

「んで、どうするんや？アルベル」

「……」

強引ではないようである意味もの凄く強引な手段を無意識にやってのけた呂布に、アルベルは何だかやるせない。

半ばうわの空な彼を氣遣ってか苦笑気味に組まれた女の腕が、実に重かった。

第三句 空蟬の声（後書き）

実はまだルート決めてません。
呉か魏で迷い中なう

第四句 鎖状の弓

——換金所は在るか。

まるで監視員よろしくに張遼を半ば無理矢理置いていった呂布を呆然と見送った後、どこか行きたい所はあるのかと問う張遼に、取り敢えず頭を切り替えたアルベルはそう答えた。

情報収集は確かにするべき重要事項だが、それをするにしてもまず必要となるのは金である。此处、つまりは洛陽周辺は彼の居たアーリグリフのみに飽きたらず大陸全土で要る筈の、モンスターが居ない。

修練のみならず原理は不明だが何故か金を落とすモンスターを狩るのも、居ないのならば勿論不可能だ。

丁度鬱憤の溜まりつつある今でこそ必要となる奴らは、姿どころか気配すら感じない。まるでこの大陸そのものから、モンスターという怪物が『消えた』のではなく、始めから『居なかった』かのよう

に。その所の真相も確かめておきたいのだが、それよりまずは路銀の確保である。

幸い、アルベルの持ち物の中には多少のブルーベリイに料理素材、そして人手が足りないからとフェイトに無理矢理参加させられた鍊金によって持っていた鉱石が二点ほど。

今まで良く持っていたモノだと、それとも持ったまま忘れていただけかと自分自身に呆れたアルベル。

だが、売れば少なくとも金にはなるので不幸中の幸いと云った所だろう。

つまり、金を作る算段は始めから合ったので、であればさっさと清算して行動するのがアルベルの心算であった。

「お、おったおった。今ええか？」

「おや、これは張遼様。今日はどういったご用で？」

換金所を珍品を好む商人と置き換えて、そして心当たりがあつたのか組んだ腕を放さずズルズルとアルベルを引つ張る形で揚々と進む張遼に彼にしては珍しく大人しく着いて行つた先。

漸く目当ての人物のシマを見つけたのか、張遼が彼女に似合う爛漫とした笑みを浮かべた相手は、商人にしては中々格好の整つた恰幅の良い男が居た。

——どうやら当たりを引いたらしい。

彼にとつては見知りである張遼の隣立つアルベルをそつと値踏みするかの様に一瞥した後、やんわりとした笑みを向ける。

なる程、上手である程金の匂いに敏感である商人は、アルベルと同じように彼を当たりと付けたのだらう。

かつての敵国シーハーツの膝元である商業都市ペターニに、こういう人間は一人や二人は確実に居るであらうとアルベルは思った。

「実はこの御仁がなかなかええモン持つとるらしくての、良かったら見てやつてくれんか？」

「それは勿論。丁原様にもよくして貰つております故、張遼様のご紹介とあらば喜んで」

とんとん拍子に話が進むにつれ、無理矢理気味ではあるが張遼を付けて貰えたのは結果として良かったのだらう。

でなければアルベル一人では換金一つに手間取つて居たかも知れない。

それでは、と話を打ち切つて此方へとにこやかな表情を向ける食えない男に、アルベルは無言で二つの内一つを手渡した。

——ダイヤモンドの塊を。

「——つ、こ、これは……何という事か……」

「おわ！　なんやコレ……こんな綺麗な宝石、しかもこのデカさ。

初めて見たで……」

いざ渡して見ればやはり検品などする必要すら無かつた。

どこからどう見ても、それも宝石などの金品に興味をあまり抱かない張遼の素人目からでも分かる、この品は間違いなく一級品である。

声を荒げてしまつては無論、行き交う街の人々の足も止まる。であれば注目が集まり辺りもまた騒然とするのは当たり前であつた。

瞳の色を完全に變えてしまいながらも何とか咳払いを一つおいて、商人は恥と知りつつも尋ねた。

「こ、これをどこで……？」

「ああ？ 作つた」

「作つたあ！？」

今度こそ商人と張遼とは氣を失いそうになるほどに驚愕した。洛陽のみならず宝石などを作るには鉞山で発掘された原石を職人によつて氣が遠くなる時を費やして加工され、初めて生まれる。

当然人工的に生まれる訳ではないので商人からすればどこで発掘、もしくは拾つた奪つたを聞いたかつたのに、作つたと言われれば驚くのも当然だろう。

だからこそ一流の商人である矜持すら捨て、矢継ぎ早に『客』に対して商品の入手経路を聞き出すというタブーを行う男の姿に、アルベルは漸く拙い事をしたと悟つた。

——鍊金という概念がない、もしくは技術がないのは言質を見れば瞭然。

——であれば、他にもアルベルの世界観そのものと違つ点が幾つも浮き彫りになる可能性もある。

「おい、デメエに聞きてえ事がある」

有り得ない事は有り得ない、フエイトやクリフを始めとした数奇なる運命の奔流に吞まれた際、アルベルが一つの心情として加えた言葉である。

現に彼の常識と云う枠組みは既に幾度も打ち壊されていた。

竜すら比べれた豆粒にも映るほどに巨大な船に、桁違いの文明、技術、そして。拳げ句己が世界は、存在は、プログラムに過ぎないと、

作り物の烙印を叩き付けられた事すら在る。

だが、アルベル達はそれらを全て乗り越えて、自分の現実を勝ち取ったのだ。

だから彼はまだ僅かに冷静でいられたのだろう。

魔法という概念、惑星レベルの技術の見劣り、モンスターの有無、そしてアーリグリフやシーハーツと云った国々の存在。

それら全てが否定された上でアルベルが揺らぎ、迷い、苦しみなながらも出した結論。

「未練がねえだと……笑わせんな」

——クレアとはもう、逢えない。

どうしてか、やはりか。

浮かぶのはあの女笑顔。

死した身であつた筈がもしかすればと、ひっそりと淡い雪の様に舞い落ちた未練と云う名の希望は、無邪気なる風に溶けた。

アルベルの結論。

きつと、確実であろうという確信に、そしてそれを憂う弱くなった自分の姿に彼は目を背けるように空を仰いだ。

——死した身は、世界を超えた。

そんな安っぽい物語、果たして誰が筆を執り、描き始めたシナリオだろうか、アルベルは歪んだ笑みを浮かべる。

未練は振り切る、弱さは切り捨てる、強さのみに拘り続けてしがみついて来た借りを、アルベルは漸く清算した。

漠然と、まるで意味の分からぬ問い掛けをしたと思えば、急に空を仰いでいたアルベルに、商人はいよいよ分からなくなる。

人は二本の脚で歩くのかと、それとほぼ同じ問い、最早答えるまでも無い常識を無心ながらもわざわざ丁寧に対応した彼は、確かに一流の商人であつただろう。

スツと惹き付ける紅い瞳を閉じたアルベルを呆然と眺める張遼であつたなら、答える余裕などなく無言であつたかも知れない。

けれど、閉じた瞳をやんわりと開け、同性で有りながらも心を奪われてしまいそうな美しく、そして儂い笑みを浮かべたアルベルに。

商人は、張遼は、彼という人間を測る事が出来なくなつた。

「おい、商人。結局テメエはこれを買うのか、買わねえのか。サツサと選べ」

不意打ちな笑みに続けられたのは、漸く本題とばかりに繰り出されたアルベルの鋭い眼差しだった。

次々に起こりうる訳の分からない展開を招く男の一言で、商人は自分が商人という立場であつた事を思い出す。

正直、それほどにアルベルと云う男は色々と理解の範疇を超えていた。

だが、しかし。

『客』というスタンスを再び取り始めたアルベルに、『商人』である身の自分が『商人』というスタンスを放棄する訳にはいかない。

気付いても兼ねて一度咳払いをすると、彼もまた交渉のテーブルに手を置く事を良しとした。

「……失礼致しました。では、まずお名前を宜しいですか？」「アルベル」

「畏まりました、アルベル様。申し訳ありませんが、今は差ほど手持ちが御座いませぬ。よつて鑑定次第に用意させていただく金利に時間が掛かるかも知れませぬ。アルベル様は何時までこの洛陽に居られる予定ですか？」

商業の基本は、先ず相手方の情報を聞き出す事が大事だ。

仮にアルベルが長期滞在するのであればじっくりとした交渉を、直ぐに発つと云うならば寧ろ好都合である。

「……明後日の明朝に、発つ」そして真実の破片を掴み取る事に成功したアルベルの心には、状況の静観という選択肢はない。

仮に世界が違つと云うのであれば、この世界を知り、生き方を決め

るだけ。貫き通す矜持は、最初から決まっていたのだから、後は脚を動かせば良い。

——それは急な決定なのだろう。

少なくとも身の振り方が無いアルベルはひと月は洛陽に滞在するであろつと予測していた張遼にとって、彼の発言は何度目か分からぬほどに彼女を驚愕させる。

先程、街の大通り故に剣を交えない事に落胆していたのは、無論アルベルだけではない。

だからこそ、ひと月辺りの間で彼と手合わせでも申し込んで、じつくりとアルベルという存在を吟味してみようかと。

それほどまでに張遼にとってアルベルは、『紛れもなく強者である男』とは、興味を抱かずにはいられない対象であった。しかし。

「え、えらい急やな。もう少しぐらい此処におつてもええんやないか？」

「もう俺は決めてんだよ、阿呆」

己の提案に一考すらないアルベルの愚直ともいえる真つ直ぐな眼差しに、張遼はふと、マズいと呟いた。

天を仰ぎ、瞳を閉じた女性の様な顔立ちの良い横顔。

想像も出来ない葛藤に押し潰されそうになりながらも、けれど折れない『強さ』を見せた血濡れの瞳。

譲らない道筋を進む独尊、全てがマズいと張遼は思う。

——惚れたのだろうか。

多分、そうなんだろう。

彼に真名を詠んで貰いたい、唐突に抱いた己の心に、張遼は、霞は嘘を付く事を善としなかったのだから。

「ふむ……では、馬三頭に長期の旅が出来る路銀を。これで如何ですか？」

「ほう……なかなか安く出るじゃねえか。俺を舐めてんのか？」

「誠に失礼致しました。では、路銀をその倍出しましょう。加えて、

先日奴隷市より購入した女を二人。どちらも客手が付く前であり、特上でございます」

「……使えるか？」

始めてという訳ではないが、やはり慣れない患いに頭を悩ます張遼を余所に、アルベルと商人の会話は進む。

幅広く、それも都市である洛陽で商業を開拓してきた彼は当然、色欲に関わる商事にも手を出している。

しかし、特上であると、処女であると聴いても揺らがない所から見ても、落としにくい相手だと商人は思う。

アルベルの問いの本質は、性交に関してではなく彼の旅を補助する立場として使えるか、否か。

主語の無い問い掛けにそのニュアンスのみで読み取れたのは、商人の観察力の賜物であった。「ええ、勿論。兩名共に武人の志はあったものの、運が悪かったのだでしょうな」

「……フン。なら明日の晩、もう一度此処に来る時に連れて来い。」

そいつらをどうするか、その時に決める」

ボロボロの衣で巻かれた左腕を腰に当て、もはや彼の印象の主となつてしまつた鮮血の瞳を細めれば、商人は気付かれぬように息を付き、これで決まりですなと呟いた。

交渉をアルベルが打ち切つた時点で、それは彼にとって鑑定に意義無しと頷いたのも同然の事で。

随分と欲が薄い御方だとアルベルの評価を定め、改めて商人は自分の勘定の計算をし始める。結果、得をしたのは当たり前前に商人の方であつた。

——かの袁召でも持つと限らない一級の宝石。

——そしてアルベルという未知の知識を持つた貴重な存在と関係を繋げた事。

この二つを持つてしてみれば、払つた金利など充分過ぎるほどに釣りが来る。

「それでは、明日の晩にその宝石を持って此処にいらして下さい。」

私も準備をしておきましょう」

「……期待してやる。サツサと行け」

相変わらず不快を呼ぶ荒んだ言葉に強烈な眼差し、しかしその隙間から垣間見れる魅力は、確かに庶民と呼ばれる存在とは程遠い。

成る程、万人には好かれはしないが……と商人は頭を垂れた後、彼らに背を向けながらも思う。

強靱と脆弱、その両面を実にバランス良く持たれる御方だ、とも。

そして、未知なる知識、見慣れない装いに、万人が持ち合わせぬ格別の威圧感。

「まさか……」

あれが噂の、と。

そこから先に続く言葉を呟いた時には、既に彼らの姿は見えない程遠くまで歩いていた。

——もしやあの御方が、天の御遣いなのか。

疑問に答える言葉など、ない。洛陽全体をも突き抜ける大きな、それでいて柔らかな白風が何かの胎動を予感させていた。

どうしてこういう状況に流されたのかを思い出そうとする時点で、

大概何かしらの不可抗力が絡んでいるのは最早アルベルにとって経験則に基づいた事であった。

目の前には、斧を担いで此方を睨み付ける銀髪の、美しい女。何がどうなっただけで彼女と対峙する事になったのか、アルベルには別に分からない事ではない。

しかし、そこに絡んでくる不可抗力は、何故か不服そうにアルベルを見咎めているだけで。

——元はと言えば、テメエが吹いたのが原因だろうが、糞虫。声を大にして言いたい、言えない事情が彼にはあった。

——思い返せば、聞きたい事があるとアルベルを自宅へと招いた張遼が、偶然調練も兼ねた手合わせ目的で張遼を尋ねて来た銀髪の女性……華雄へ紡いだ言葉が原因だった。

『おう華雄、さっき振りやな！ 悪いけどウチ、今からアルベルと手合わせするから後にしてくれへん？』

——後にしてくれ、つまり自分は不要、つまり自分よりあの男を優先、つまりあの男は自分より強いのだと張遼は見ている。つまり、舐められた、つまり……

ピコンピコンと脳内を見ればどんな仕組みになっているのかと目を剥く回転をしながら華雄が導いた結論はつまり。

『つまり……勝負だ！』

『何がどうつまりで勝負だ、このド阿呆が！』

愛具であろう、華奢に映る華雄の身体では普通持ち上がらないであろう大きさの戦斧を肩に担ぎながらアルベルを指差し、勝負を申し込む華雄にアルベルは本格的に此の世界の住民に対して常識を求め始めていた。

あの『歪み』のアルベルともあろう者が、『常識』を求める矛盾、この時点でかつての仲間であるフェイトであればどんなに歪んだ世界だと匙を投げていただろう。

そしてそのまま押し切られて、今に至るのだからやってられない。本当にやってられない、自信が無いのか、と云う餓鬼でも笑うような挑発に目くじら立てた己自身に。

「……なんだ、貴様のその左腕は。ボロボロだが」

対峙し、今にも振り下ろさんと大斧を高く構えた姿の華雄が、未だに自然体のままやる気なさげに立つアルベルの左腕を指摘する。

幾重の布に覆われた腕自体は存外に細く、しかしその布の厚みはまるで誰も彼もを寄せ付けぬように。

そして指摘されると同時に忌々し気に表情を歪めたアルベルに、華雄は容易く触れて良い事では無かったか、と瞑目した。

しかし、だからといって加減を加えるのは武人としての誇りを散ら

す行為だと、華雄は元より手を抜く気はない。

例え相手が怪我人であろうと、女であろうと男であろうと子供であろうと。武器を持ち立ち塞がるならば、等しく相手は皆、武人……それが華雄の持論である。

「……身体を解す相手を見繕う必要も無くなった。礼を言ってやるよ、女」

——瞬間、爆ぜる。

手は抜かない、否、手を抜く必要など無かったではないか。

首筋をチリチリと焦がす真紅色の覇気を幻視してしまうほどに、目の前の男が急激に表情を変えた。

単なる者としてはとても測れぬ力の奔流を纏い、獣に似た獰猛さと歪み始めた冷たい笑みに、華雄は曖昧な概視感を覚える。

姿、形、武器、異なるモノは多々あれどその力の奔流を発する根源は、やはり同質。

——呂布 奉先。

己の武に絶対の自信を持っていた華雄の矜持を、手に持たぬ刀を持つてして容易く壊してしまった程の、絶望的な強者。

その蒼天に伸びし絶影に、目の前の男が重なる。

「私は……華雄だああ!!」

絶叫、それは女と指したアルベルに対しての荒々しい返答か、長い時をかけて繋ぎ止めた継ぎ接ぎの矜持を、壊さぬための魂の咆哮か。剥き出しにした豪たる刃を、全身を使って荒々しく振り下ろした華雄の一撃を、アルベルは。「……フン」

——受け止めた。

抜刀し、構え、避ける必要すらないと言わんばかりに。

「な……に……?」

有り得ない、斧と刀、かち合えば質量、重量、その他要素も見れば明らかに斧に軍配があがるハズである。

華雄が繰り出した必殺の一撃は、文字通り避けなければ只では済まない事を暗に示している程であり、回避行動を取らなかったアルベ

ルに対して一瞬、華雄が躊躇すらしたにも関わらず。「ば、馬鹿な……」

並みの剣であれば、真つ二つどころか衝撃の伝達によって粉々に碎けてしまっても不思議ではない。

それ程の一撃、だが剣は折れるどころか平然と華雄の戦斧を押し返してくる。そう、押し返しているのだ、剛力と称して何ら違和の無い華雄を。

——かつて星の災厄とも云えた哀れな創造者を乗り越え、大陸最強とも囁かれたアルベルに、魔剣クリムゾンヘイト。

アルベルを知る者であれば誰でも闘うのを拒否するであろう二つの組み合わせは、確かに最悪といえた。

驚愕に歪む華雄の表情を見据える細長い紅の双月は、まともに直視すれば喰われてしまうのではと、身体が恐縮してしまう程で。

…… たった一合、刹那の速さで、勝敗は既に決していた。

「……止めた」

キンツ、と耳奥を刺す金属音が鳴り響けば、クリムゾンヘイトの峰に払われた華雄の斧が、力無く大地へと沈む。

大石でも落石したのかと思わせる轟音は、既に華雄の耳には届かない。

「——あ」

——負けた。

いや、勝負にすらならなかった。アルベルに垣間見た絶対な強者としての姿に、怯えてしまった華雄自らが勝負を捨てたような物だ。完敗どころではない、これでは、これではまるで。

—— 武人としての、恥。

「……」

手放した己の愛器を茫然と眺めながら、瞳を震わせる華雄にアルベルはおるか張遼ですら声を掛けない。

寧ろ彼女は、華雄を精神的に叩きのめしたアルベルに対して厳しい眼差しを送っていた。

——何のつもりか知らんけど、惨い事するやん。
渾身である事は間違い無かった華雄の一撃を、避けずに、受け止めた。

その選択は華雄という人物とは割合付き合いの長い張遼であれば、どういった結果を生むのかなど目に見えていた。

「……悪いが、俺は弱い者虐めは嫌いなんでな。まともに相手をして欲しいんなら、精々足掻け」

「き、さま……私を、弱者だと……」

だが、尚足りないのだろうか。矜持を壊し、さらに砕けた破片を踏みにじらんとするアルベルの言葉に、霸気の灯らぬ華雄の震えが弱く響く。

それを見たくはなかった張遼は、静かに目を伏せながらも思考を巡らせる。

——アルベルは、何を望んでいるのだろうか。

「クク……そうだ、その面。威勢だけじゃねえなら、俺を満足させて見る」

——成る程、とアルベルは思う。

矜持の崩れた『強者』はこういう顔をするのだらうと、実に最高の眺めじゃないか、と。

かつての自分と同じ局面に立たされたこの女が、果たして再び強者として現れるか、弱者として暗い奔流に吞まれるか。

精々楽しませてくれるならば、それでいいだらう。

——クレアの居ない空白、今更何で埋められる？

——埋められないのであれば、別を探せば良い。

アルベルはもう、決めている。——その為の、精算だったのだから。薄暗く陰りの掛かった空が、眠り始めるを善しとするかのように、一層暗く色を沈める。

淡い胎動を予感させる灰色の空に、何故だか嘲笑れた錯覚を覚えたアルベルは、甘過ぎる水を与えられたが故に涸れてしまった渴いた

笑みを、一つ。

——それでも彼の横顔は、月の様に美しかった。

第四句 鎖状の弓（後書き）

まともなバトルにならないのは、あくまで序章だから。
ある意味、華雄とアルベルって似てると思うのさ
あ、あと展開早いのすんません癖みたいなもんです……

第五句 渚の浅夢

力に絶る生き方をしていた過去に、後悔は無い。

傲慢な己を呪い、憎み、蔑んで、そんな自分でも掬い上げようとするどうしようも無いお人好しが一人や2人、現れるのをアルベルは知っている。

だが、アルベルは後悔した。

力への依存から、持て余しそうになる温もりへの依存を、選んでしまった事に。

悔いて、嘆いた己をみつともないと思いながらも、拒絶する事は出来なかったのは、きつと。——温もりが教えた、弱さを認める強さを、アルベルは受け入れたからだろう。

宵を迎えるにはまだ早いばかりの、夕暮れ時。

暁に染めた海の鏡に広がる千切れ雲一つ一つに、くつきりとした陰陽は確かに存在する。

当たり前の筈だと云うのに、時折無償にそれを悔しいと思うのは何故だろうかと、華雄は柔らかく目を伏せた。

——感傷に浸る時間を作れるくらいに、磨り減った心は落ち着いた。直視し続ければ目を焼かれてしまうのでは無いか、そう思えるほどに照りつけていた太陽は、言わば光の塊。

それほどの光の側に在るとしても、あの雲の影は失われる事は無い。真つ白に陰りなく、どこまでもどこまでも真つ直ぐに染まらぬ程強い心が、欲しいと。

光と影の切つて離せぬ関係の様に、躓いてぐるぐる巡って止まらない、心の影を取り払うには不可能である事実が、ただ華雄は悔しかった。

「……所詮、池を泳ぐ蛙に大海の広さなど分かんという事が」
また一つ、影から零れた薄暗い自嘲の笑みに華雄はらしく無いなど、力なく瞳を細める。

知らない訳では無かった、自分では到底届かぬ頂きがあることなど、呂布と出会った時からずっと知っている。

ただ、理解をする事を心が拒んだ。弱い自分を、呂布は特別なのだと下らない評価の押し付けに誤魔化して、蛙は垣間見た大海から目を背けた、それだけの話。

けれど、アルベルとはそれだけでは終わらなかったのだ。

池とはまるで異なる大海の恐ろしさ、それから目を逸らすのを彼は赦さなかった。

「……あの男、私より遥かに強かったな」

柔らかに滑り落ちた言葉は、華雄に似つかわしくない純粹な肯定。強いものは強い、そう認める事に抵抗はないが、華雄より強いかを例え事実であつてもすんなりと認めるなど、果たして彼女が出来た思考であつたか。

その例外は今まで唯2人、大陸最強とも云われた呂布と、かつてまるで幼子を相手するかの様にあしらわれた、華雄にとっての宿敵である孫堅。

唯、果たして彼女らに対し、こうまで清々しいほどに負けを認めていただろうか。

——受け止められた。

あしらう事も出来た筈だ、寧ろアルベルなりのあしらい方だったのかも知れない。

けれど、アイツは避けなかった。それが余計に悔しい筈であつたのに、本当にハッキリと『華雄は弱い』と言われたような気がした。

「……」

呂布は言ってくれなかった。一合も保たず吹き飛ばされ、大丈夫かと唯それだけ。

孫堅は教えてくれたが、結局刃は交えなかった。単純な戦略性、謀略に踊らされた自分が、未熟さが敗北を招いただけ。

だから、華雄はどこかで捨てなければいけない慢心を捨て切れなかった。

――仮に呂布だろうが孫堅だろうが、我が一撃を与えられれば唯では済まない筈だ。

その驕りが武人にとって愚かしく、成長を止める事であると知っているのに。

悔しさが募り募って堕ちた感情を、『精算』する事が出来なかったのが華雄の不幸であつたのかも知れない。

脚を取られていた泥の沼に気付くには、彼女の哀れな希望を打ち砕いてくれる確証が無かつたのだ。

「ハハ……なんだ、みつともない」

自らの恥に気付くのは、確かに遅かつたのかも知れない。

けれど、気付く事は出来た。

そして、沈んでしまった沼から引きずり出してくれる手を必要としなくとも、華雄は自ら再び歩き出す事が出来る『強者』で在った。

朱に馴染んだ茜の空に響く、渴いた声は小さく。

弱さを知る、それを恥と涙を流す事が出来るのは、きっと強いからなのだろう。

ゆつくりと零れ落ちていった涙を隠す幻想的な銀色の前髪を、悪戯に風が揺らしていた。

暁を終え、深い紫黒が空を飾る頃、いい加減くどいと突っ張りたい心境に駆られながらも結局、またアルベルは面倒事に首を突っ込んでいた。

否、突っ込まれたという方が彼にとっても他から見ても正しいのは

きつとそういう事だろう。

半ばうんざり気味に隣で冬眠間近の小動物よろしくに頬を膨らませる程、淡々かつ大胆に食事を取る呂布を一瞥して、溜め息。

この無垢な少女に恨み言は山ほど在るが、言ったところで理解出来そうも無いと、諦観に暮れるアルベルは取り敢えず、今回の厄介事に目を向けた。

「……何よ」

まず一人。

深いグリーンと珍しい色をした長髪を左右とも三つ編みにし、印象を深める黒い帽子に眼鏡。その内でやや鋭く細められた瞳が、強かな攻撃性を散らつかせる。

背丈は恐ろく陳宮と同じか、それ以上とやはり張遼や呂布と比べれば低い。だが、アルベルにとって彼女の反応は実に好ましいと思える。

いかな理由があるとはいえ警戒する意識を此方に提示するのは、合格点だ。

いい気分はしないのは確かだが、呂布の様に不明瞭な信頼を受けるより此方の方がスッキリする。流石に警戒するといっても陳宮みたいな真似は正直、相手をする意欲が湧かないアルベルであったのは余談。

「あ、あの……」

だが、アルベルにとって問題なのは次だ。

芯を今一つ感じない薄い声は確かに可憐に響くが、どうにも自分に自信を持ててないような、奇妙なアンバランスを抱かせる。

きっと、それは彼女が身に纏う衣装が実に絢爛豪華であるのに対して、無意味な謙遜と云うかオドオドした態度を見せるところが、ア

ルベルの思う『お高く偉い気になった奴』のイメージと大きく異なっていたからだろう。
目に毒な眩しさを放つ服装の奥に映える顔立ちや柔らかなウェーブの髪と、如何にも善人そうな無垢さが顔の造りにすら現れてる様に見える。

きつとアルベルが苦手とする『無垢で素直』な、彼の紅暗い瞳では直視するのが厳しいほどに眩しい人種であるのは、間違いない。

多分、相容れない訳ではないが互いに恐れる何かがあって、その所為で近づく事も出来ないような、そんなモノ。

現に、恐る恐ると声を掛ける少女に、アルベルが気怠げに視線を返せば驚いたように肩を震わせている。

睨むなと理不尽に咎める隣の金色の瞳の方が、アルベルにとって余程分かりやすい存在であった。

え、えつと……と気を取り直して一拍置くと同時に、月に映える銀の髪が優しい光沢のドレープを作る。

呂布を小動物と例えたが、彼女に比べれば此方はまるで人畜無害な存在ともいえた。

「わざわざ、お呼びして……その、すいません。うう……」

人畜無害とは同時に極めて臆病であると云っても差ほど相違は無いだろう。

であれば、大狼の唸りを彷彿させるアルベルの強烈な眼光に、震える兎が言葉を詰まらせるのも致し方ない。

そもそも、小さく頭を下げる彼女が言った通り、アルベルは彼女に命じられた呂布によって連れて来られた、謂わば不可抗力である。

それなのに目を合わせるだけでこつも怯えられては、彼の蓄積し易い苛立ちが一層募るばかりだった。

「私は董卓、と言います。お、お名前は……アルベルさんで、良かったですよ、ね？」

「……」

無言の肯定を何とか受け止めながらも、董卓と名乗った年端もいかぬ少女は、あちらこちらと焦点が忙しないベージュの瞳を漸くアルベルへと留める事に成功する。

しかし、それは彼の奥深く魅せる紅の瞳と思い切り目を合わせる事になり、元より人見知りであつた董卓は直ぐに視線を逸らしそうになつたのだが。

踏ん張れたのは、それを超える興味が強かつたからだろう。

「あ、アルベルさんは武人の方、ですか？ 何だか、変わった服装をしてますけど……へう」

言葉にして、これは流石にどうだろうと董卓は何故か頭の回らない自分に泣きなくなつた。

武人かどうか等、腰元の業物と彼自身が纏う強靱な雰囲気で悟れる事であり、何より変わった服装とは普通に失礼である。

現にひくりとアルベルの眉間が動いた時点で、董卓は失敗を確信したほどだ。

「……武人と言うより軍人だ。格好は、これが動き易い、それだけだ。妙な事聞いてくんじゃねえよ」

しかし、返ってきた彼の反応は董卓の想定していたモノよりずっと穏やかな内容と声色であつた。

正直、陳宮に聞いてはいた彼の気性から云つて怒鳴られても文句は言えないと覚悟していた程だ。

けれど、あまり気にしていない事なのか特に憤慨した様子もなく、軽い叱咤を受けた、それだけ。

思つたより大人しい人なのかな、と董卓は素直さ故に直ぐさま印象を書き換える。

——そもそも、董卓にとってこれほどまでに興味を惹かれたのは久しぶりの事であつた。

彼女の腹心にして親友である賈馮の開いた会議で陳宮と呂布より耳

にした、変わった男の話。

溜まった鬱憤を吐き出すようにアルベルという男はやれ無礼だの愚鈍だの正体不明で胡散臭いと愚痴っていた陳宮に、アルは強い、アルは速い、変わってる、あんな男見た事ないと短絡ながらも評価を淡々と述べる呂布。

今一つ伝達能力に欠ける二人が特徴を述べるモノだから、董卓だけでなく賈馱もまたどんな奴だと想像を巡せる中。

呂布が呟いた一言、それが彼女の心の琴線に触れた。

——アル、寂しそうだった。辛そうな、目をしてた。

武についての心得が非常に乏しい彼女であつても、呂布がその頂に立つ程の強者であるのは知っている。

そしてそんな彼女が強いと評すのだから、相当な猛者や豪胆な輩を想像していたのに。

『——人ぼつち、かも知れない』

よく、分らない。

けれど、暖かな光に包まれて出来ているような董卓の優しく甘い心は、辛そうな、寂しそうな……まるで、以前の呂布みたいに苦しむ人間を、放って置けなかった。

そして、人の心の弱さ、脆さ、強さの全てを識っている優しき少女は、アルベルの心を覗き込む。

「あ、すいません。えっと……アルベルさんは、お幾つなんですか？ 出身は？」

「今、二十四。洛陽に比べりゃ名も霞む田舎だ、言う必要ねえよ」

他人の優しさに極めて敏感に、そして臆病になってしまったアルベルは、そんな人の心に触れようと、距離を柔らかな一歩でジワリと詰めて来る董卓に、概視感を抱く。

孤高であり孤独であつた欠け、割れた硝子の存在を、怪我する危険も恐れず掌で包み込んでしまったあの女と、被ってしまう。

女々しい事だと、アルベルは内心で自嘲する。
切り捨てはしないが、ある程度の割り切りはしていた筈だというの
に、一々と思い出すのはやはり浅ましい、と。

さて、どうなるものかと。

彼を一目見た時より厄介だの危険だのと色々とアラームが鳴るのを
抑えながらも、親愛なる友を尊重し静観を決め込んだ賈馱だったが、
存外に杞憂で済んだことに小さく胸を下ろした。

アルベルなる人物に会ってみたいと、そう言い出した董卓に無論、
賈馱は反対している。

第一、単なるならず者かも知れないし、陳宮の話を聞くだけならば
粗暴な輩であるという印象が強い。

無論、呂布絡みでの陳宮は余りアテにしないのだが、それでも只で
さえ問題を抱えている情勢の中、要らぬ警戒を持ちたくは無かった
のだ。

しかし、賈馱は知っている。

優しさから滲み出た決断に関しては、董卓は妙に頑なである。

それが時に不幸を招き、けれど救いを齎す事もあるからこそ、賈馱
は董卓の意志を突っぱねれなかった。

「……ふうん」

交わされる、他人が聞けば何でもない雑談に過ぎない会話を、それ
でも懸命に続けようとする董卓を見て、彼女は思う。

相変わらず、誰かの苦しむ姿は大なり小なり見過ごせない質である
と。

予想外だったのが、剥き出しの刀身の様な荒々しい雰囲気を持つア
ルベルが、何だか嫌に大人しい対応を見せている事。

それも、董卓と会話が募るごとに、徐々に、剣呑な面立ちは成りを
潜めていくのだから、素直に董卓が凄いのかアルベルに対する認識
が間違っていたのか、賈馱には分からない。

深い深い、見るごとに深いと思わせる玄黒の髪は、墜ちるに連れて金色へと塗り潰されている。

縛られた後ろ髪の長さや、きめ細かい肌に淡麗な顔の造りが相俟って、賈駆は最初、アルベルの性別を疑っていた。

しかし、ボロボロの絹で幾重にも巻かれた左腕は、見れば見るほどに眉を潜めてしまう。

余程の重傷でも負っているのから、ダラリと下げられたまま動かないその様が、まるでアルベルの物言わぬ罪を語っているようで。

「でも、アルベルさんって何だか……女の人、みたいですよ。凄く、綺麗です」

「喧嘩売ってんのかお前」

「へ、へう……すいません」

「チツ……冗談だ、一々謝んじゃねえよ阿呆」

一体何が在ったのだろうか。

良い意味でも悪い意味でも目を惹く存在であるのは間違いないであろう彼に対して思う所は多いが、それにしても。

随分と人であろうが獣であろうが本人にその気が無いにせよ、手懐けるのが上手いものだと言駆は小さく笑う。

正直な所、一軍の長である董卓に対し粗暴な口を利くアルベルに注意しようとも、簡単に頭を下げてしまふ董卓に頭を抱えたくともある彼女だったが、何時の間にか張り付いた空気は無く、何より愉しそうな董卓の柔らかな横顔に、複雑ながらもやはり静観を貫く賈駆であった。

「それじゃあ、アルベルさんは明後日に発たれるんですね」

「……それがどうした？」

「へう……折角、知り合えたのに。残念です」

問われた事は些細な内容ばかりであったが、極力感づかれまいと伏

せる所は伏せた訳だが。

それはとは別に、どうやらアルベルは呂布、張遼に続き董卓にまで気に入られたらしい。

世辞ではなく事実残念だと言わんばかりに儚げな表情をする董卓に、幾らアルベルといえどバツが悪いのは悪い。

そもそも、万人に好かれたいとも思わないし、事実忌避される存在で彼にこうまで善意を向ける人物など数えるほどしか居なかった。頭の締めまらねえ連中だ、と物好きな少女達に取り敢えず疲労混じりの溜め息を一つ。

「ていうかアンタ、今日洛陽に来たばかりなのに直ぐに出て行くなんて、何しに来たって話よ」

「別に、此処じゃなくても良かったんだがな」

会話を折るまいと今まで寡黙に徹していた賈馱の呆れながらの言葉に、アルベルも内心では同意する。

確かに動くにしても速過ぎたのかも知れないが、彼からしてみればのんびり日和ながらというのは気性に合わない。

一日の猶予でさえあくまで気紛れのつもりだったのだ、本来ならば今日中に発っていてもアルベルなら不思議ではない。

「……」

しかし、董卓にとってそれは確かに寂しい事ではあるが、同時に胸を撫で下ろす事にも繋がる。

華雄をも下す実力者であるならば迷想に駆られる自軍に力を貸して欲しいとも思う部分は、確かにある。

けれども、アルベルほどの力を持った人物がこの洛陽に留まれば、きっと遅かれ速かれ彼は董卓軍が抱える問題に巻き込まれてしまうだろう。

ならば、無関係の彼を巻き込む前に早々と此の洛陽を去ってくれる方が、アルベルに危険は伴わない筈。

——どうして、自分はこんなにも彼に入れ込んでいるのだろうか。それは董卓の持つ慈愛の深さによるものが根底にあるのだろうか、

上から降り積もる要素はきつと、呂布の言葉が間違っていなかったから。

寂しそうだっただ、アルベルは。

失ってしまった何かを求めるように移ろう傷だらけの心が、あまりにも辛そうに見えたから。

そして、癒えない痛々し気な深い傷を隠そうと、『透明』な布で隠したつもりである彼を、アルベルを……董卓はやはり助けてあげたいと思ってしまうのだ。

「アルベル、さん」

「……？」

不意に改まって名を呼ぶ少女に、珍しくキョトンと真紅の瞳を丸めるアルベル。

ああ、なんだ、と董卓は漸く心の中で少し引つ掛かっていた靄に、突き抜ける陽射しが差し込んだのを理解する。

——多分、見た目よりは強くないかも知れない、この人は。

「私の事は、月って呼んで下さい」

つい先程まで眼光一つで怯えて言葉も定まらなかったというのに、理解してからは簡単だった。

董卓——月は、多分アルベルが気になる。自覚出来る。

何から傷を負って、何を傷付けて、何に迷わされて、何に悲しんで、そんなにも脆い心で、どうして強く在れるのか。

——強く、在ろうとするのか。

多分、これは異性としてとか、そういう小綺麗な感情じゃない。

人を愛した事はある筈なのに、愛されることを信じられない、可哀想な人。

明確にするならきつと、同情なのだろう。

優しく暖かく、残酷な同情だった。

「ゆ、月！？ 真名を預くるなんて……本気なの！？」

「……詠ちゃん。うん、アルベルさんなら……良いかなって思えるんだ」

狼狽を見せる親友や周りの表情に、やっぱりおかしいのかな、と小さく笑みを零す。

出会って間もない、それも異性に真名を与える事はどういう意味に取られるか等、月とて分かっている。

けれど、例えばそう思われたとしても、月は構わないと思った。

アルベルはきつと、同情される事を嫌う人間だと分かっている、同情してしまったから。

行動に、移してしまったから。

だから、ごめんなさいを言わない代わりに、贖罪でもあった。

「……テメエ、何のつもりだ」

「ごめんなさい、アルベルさん。嫌なら別に呼ばなくても、大丈夫ですから」

案の定、アルベルはどうにも解せぬのか気に食わないと、不満を表に出している。

同情されたという実感こそ無かったものの、差し出された圧倒的な善意に、彼の中にある反骨の芯が警戒を生んだのかも知れない。

アル、顔を怖いと一人変わらぬ様子の呂布が頬をつつくのも、アルベルは反応していない。

やっぱり、差し出される愛情が信じれないんだろうなあと、月は薄く笑った。

「……真名つてのは、特別なモノとかじゃねえのか」

「……へう、そう言われると恥ずかしいですけど、ハイ。確かにそういうモノです」

だったら何故という問いに、月は答えるつもりは無かった。

どうして自分が今日会って話したばかりの男に真名を預けようと思ったのか、それを他でもないアルベル自身に考えて欲しかったから。また勝手な事考えてるでしょ、と月を咎めるように、けれどももう諦めたのか溜め息をつく賈馱に、ごめんねと言葉を置いて。

「……チッ」

結局、アルベルには分からなかったのだろう。

長い沈黙の先に零れ落ちた舌打ちは、彼にとっては無意識の白旗であつた。

分かり易い弱者よりも、愚直なまでの強者よりも。

純真無垢なる善者が、アルベルにとって一番理解し難い存在だったから。

「……帰る」

長い長い沈黙の後、何時までも花が咲くような微笑を浮かべる月をひとしきり紅い瞳で睨み付けて――アルベルは理解する事を放棄する。

宵は更け、蒼の塞がれた紺碧の清空が星々にダンスを申し込む頃。

淡い灯りを頼りに出口へと向かおうとするアルベルの後に、呂布が続く。

苦虫を噛み潰したような苦しげな表情をするアルベルは、まるで逃げ出すような己の姿を、何故か恥とは思えなかった。

「……アルベル、さん」

彼は振り向かない。

もう一度名を呼ばれる、けれど脚が止まりそうになった。

「……やっぱり、迷惑でしたか？」

迷惑だったか……確かにそうなのだろう。

本人の意思とは関係なく余計な物を一つ背負わされた気がするのだ。振り切った筈のモノを、再び繋げられてしまう気さえも。

「……」

扉へと手に掛けたまま、寡黙に包まれた彼の黒と金の美しい後ろ髪を、涼風が羨むように触れた名残が引き留める。

けれど、やはりアルベルは歪という過去を背負いは出来ても、捨てる事は出来なかった。

「……気が向いたら、呼んでやる」

結局、浅い浅い夢の甘さに浸かるのは、忘れて欲しくは無かったと、未だに縛られている証拠なのか。

やはりアルベルは、彼女の真名を呼ぶ事は出来なかった。

第五句 渚の浅夢（後書き）

— T o b e c o n t i n u e d .

… ** *

ぶっちゃけ、月のキャラクターの本質って残酷なまでの優しさだと思っ
うんですよね。

だから今回はもっと正直な月を出してみようとして……暴走したな
何してんだ俺

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8490v/>

crimson hate

2011年11月20日12時05分発行